

Institute for Language Education  
Aichi University, Nagoya

# Goken News

No. 6 December 2001



ミシガン湖畔と多彩なビルディングで有名なシカゴのダウンタウンを一望すると...

## CONTENTS

### 特集 私の外国語学習法

- |   |  |
|---|--|
| ・あれからも、まだまだ<br>この歳で独検や英検に挑戦して<br>(大島 隆雄)..... 2 | ・外国語の勉強は「話すこと」から<br>(劉 柏林)..... 10       |
| ・イタリア語、杉田玄白、『蘭学事始』<br>(須藤 祐孝)..... 3            | ・より良い外国語の授業をめざして<br>(島田 了)..... 11       |
| ・私はなぜ韓国語にとりつかれたか<br>(田川 光照)..... 6              | ・Town と City<br>(安藤 聡)..... 12           |
| ・私の外国語学習について<br>(服部 健治)..... 8                  | ・2001年度 夏期アメリカ・セミナー雑感<br>(片岡 邦好)..... 13 |

## あれからも、まだまだ 一この歳で独検や 英検に挑戦してー

経済学部  
大島 隆雄

60代の経済学の老教師が、ことさら独検や英検に挑戦してしみじみ感じたことを、これから外国語をマスターしようとする若い学生諸君に伝え、なにかの参考にしていただきたい。

かつて3年前、私は豊橋校舎の外国語研究室発行の『LLニュース』No.17に、「ドイツ語との長き旅路の果てに」という一文を寄稿したことがある。そこでは、1997年夏にブレーメンでたて続けに三つの講演とそれに続く討論を行なったことと、それはいわば、ドイツ経済を研究するためのツールとして、40年以上にわたって用いてきたドイツ語能力の総決算のように思え、ある達成感にひたれたことを述べている。当時、ドイツ語で苦しむのは、そろそろこれで終わりにしたいという気持ちだった。

しかし皮肉にも、そこからまた、わざわざ自ら設けた目標への戦いが始まった。それは、これまで永年やってきたドイツ語や、昔は少しはやった英語の能力をなんらかの検定試験を受けて確認しておきたいというものであった。若い人々に交って受験するのは恥づかしい限りであったが、かまわずやることにした。

1999年春の名大で行なわれた独検では、3・4級しかなかったため、まず3級を受けた。『全問題集』の他、2・3級用の参考書なども勉強したかいあって、忘れていた語彙や文法なども思い出し、満点で合格した。春・秋通じて満点者は3名あったが、そのため表彰され、賞品として辞典をもらうことになった。しかしいい歳をしてそのためにわ

ざわざ行く気にもなれず、上京しなかった。

その年の秋、南山大で実施された独検では、いささか無謀とは思ったが、午前に2級、午後1級を受験した。また『全問題集』や、1級については参考書がないので、2級の参考書などで準備していった。しかし前夜、歳がいもなく緊張して4時間足らずしか眠れず、2級はなんとかあったが、昼食をとった後の1級では頭が朦朧として無残にも失敗したと思った。予想通り、1次試験の2級は合格したが、1級は不合格に終わった。しかし2級の2次の口答試験では武蔵大学まで出向き、これはなんとなく合格した。

独検1級はたしかに難しいが、それでも全然歯がたたないものでもないと感じた。私は2000年夏、愛大の学生に随伴して協定校のブレーメン州立経済工科大学に赴き、夏季講座の最上級に参加して、1ヵ月間、絞りだすように能力を鍛えた。帰国後の10月、胃潰瘍のため2週間入院を余儀なくされたが、病院から秋の1級に出願した。夏の訓練と入院中の休養によってか、11月の南山での1級1次試験は、今度はどうやら通過した。

その後、第2次の口答試験にそなえて、これまでの出題傾向を調べあげたところ、それらがすべて最近の日本の話題に関するものであることが分かった。そのため年末・年始にかけて10間ほど予想し、自作しておいたところ、早稲田で選択出題された4問中、「学校における成績水準の低下」というテーマが的中した。私は2分間つかえずに喋り、その後の追加質問もなんとかこなせた。今年2月初め受け取った通知は、合格だった。

これで一つの目標が達成されたという安堵感にみたされた。だが冒頭にのべたように、ドイツ語で講演したり、また論文は書いても、ドイツ人と同じようには話せないし、今後いくら努力してもそれは不可能であろうことも自覚している。

そこで私はもう一つの目標を探し求めた。それは若い頃に少しはやりながら、殆ど忘れかけていた英語を思い出そうということである。英語は今日、私たちが国際会議でドイツ人とさえそれで話さねばならないほど、国際的なコミュニケーション

ン言語となって、重要性を増しているからである。

今年の春から、私は慎重に英検2級から始め、1次・2次とも無事に合格した。独検1級のうえ英検2級もとったので、嬉しくなつてついつい人に話したところ、2級は高校生でも取れると、軽蔑的に批評されてがっかりした。そこで秋からは準1級に挑戦したいと思っている。

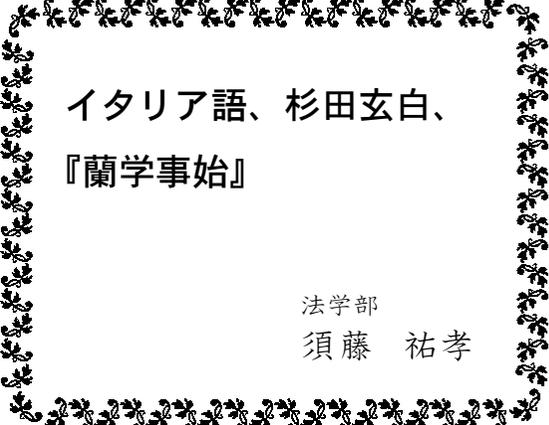
このように、最近3年間、私は2ヵ国語の検定試験を半分は使命感から、半分は楽しみながら受けまくった。その結果いろいろ感得したことがあるが、そのうち参考になるかもしれないと思うことを幾つかあげておきたい。

まず第一は、「若い頃に習得した知識と能力は一生の宝」との諺どおり、私のように高齢のものには、かつて習得したものを思い出すのが精一杯であつて、それを新たに伸ばすには非常に苦勞が多いということだ。これはすべての知識や能力について言えることではあるが、とくに外国語についてそうである。だからそれは、ぜひ若いうちにマスターしていただきたい。

第二に、外国語検定の場合、学生のなかには、私のゼミ生にもそのような者がいたが、いっきよに高い水準を目指して、何度も失敗しながら、ついに合格する人もいる。だが、私の経験では、力に応じたところから始めて、一つ一つ高みに登っていく方がよいように思う。そうすれば、基礎的なものから高次なものへと着実に能力を伸ばせるし、自信をもって検定を受けることが楽しみにもなる。

第三は、とくに欧米の言語は構造的に日本語と非常に異なるため、私たちにとってリスニングがいちばん難しいということだ。そしてその困難は、1~2年留学したからといって自然に解消するわけでもない。一連の意味をもった言葉が、一連の音の流れと対応して理解できるためには、テキストを読みながら、市販のカセットやCD、またはLL教室のAV機器を用いて、独自に繰り返し訓練する必要がある。相手の言うことが分かれば、外国語はすでに半分、習得したも同然である。この

リスニング能力は、若い時ほどスムーズに上達するので、ぜひ、この点で努力するよう心がけてほしい。



## イタリア語、杉田玄白、 『蘭学事始』

法学部  
須藤 祐孝

イタリア語を学ぶ気などまったくなかった。それが、今や、一番親しむ外国語で一番苦勞する外国語がイタリア語という具合になってしまっている。そのきっかけは、まことにあっさりとしたものだった。

大学院マスター・コースの終わり近く、指導教授から、有り難いことに、助手として本格的な研究者の道を進むよう勧めていただいた。同時に、これまで関心を持ってきたマキアヴェッリをこれからさらに本格的に研究していくなら、作品を原語で読まなければならないね、と穏やかな忠告をいただいた。その通りだと思ったので、私も穏やかに、はい、と答えた。その後すぐ始まる大苦戦など、まったく想像もしなかった。

それまで見ていた我が国のマキアヴェッリ研究のほとんどが、さらには彼の時代のルネサンス研究すらもが、ドイツの翻訳、研究に依存しそれに基づいたものであることに疑問と不満を覚えていた。だから、マキアヴェッリの作品を原語で読まねばならないという指導教授の言葉に、そうだその通りだ、さすが先生はいいことを言うなと生意気な感想を抱きながら、あっさり応じたのだ。その原語すなわちイタリア語のジャングルに迷い込

むことになる自分の姿など、まったく想い浮かばなかった。

さっそく本屋に行ってみた。今と比べると想像できないかもしれない。当時は、ちょっとした本屋にイタリア語関係のものなど何もなかった。大きな本屋に行っても、小さな辞書と小さな、簡単な文法書が見つかった。この程度のもので専門書を原語で読めるようになれるだろうかと不安に思い、さらに探した。中型の辞書と文法書を見つけて求めた。さっそく読み始めた。しかしどうにもよく分からない。どうしたらいいだろう？ そうだ、まず発音を少し覚えよう。文法書に出ている単語が発音できるようになれば少しは文法の勉強にはずみがつくかもしれない。誰か発音を教えてくれる人、イタリア語を知ってる人が居ないだろうか？

そう思って初めて分かった。私の居た大学には無論、大学が在った仙台にも、イタリア語の先生は居なかったのだ。少なくとも私の知る範囲には居なかった。色々な人に聞いてみたけれど、皆、知らないということだった。代わりにと、ある人がリンガフォンの外国語レコードにイタリア語もあると教えてくれた。さっそく入手した。当時はカセットテープというものが無かったから、外国語の発音はすべてレコードに頼らねばならなかった。十数枚のレコードを聴くための機器は、大学のものを借りて、それでテープにすべて録音した。テープはリールに巻かれた大型のもので、これをかけるテープコーダーは知り合いから古物を安くゆずってもらった。やっとこさ持ち歩ける重いもので、当時はそういう大型のものしかなかったのだ。しかも、珍しい貴重品だった。

とにかく何とか発音を聴けるようになった。アルファベットの音を初めて聴いた。テキストを見ながら単語の発音を聴き、このZはここではツと発音するのにこっちはツなんだなあというように文字通り一語一語、覚え始めた。それでも、生の音を聴いただけで楽しくなった。平行して、多様な動詞の時制や格の変化などは、小さなカードに書いて持ち歩き、バスの中でもどこでも暗記

と発音の練習を試みた。目で単語を追うだけより、音を伴った勉強は格段に楽しかった。だから、イタリアの映画『道』の中心部分のレコードとテキストが発売されていると知って、さっそく求め、やはりリール式のテープに録音して聴いた。何度も聴いた。だがこちらは、セリフの難しさ、発音の速さのためにまだほとんど聞き取れなかった。しかし、哀切な音楽と主演男優・女優の会話のムードがたとえようもなくよかった。イタリア語ってなんかすごくいいなあ、と思えた。もう男優も女優も亡くなったらしいけれど、あの二人の『道』は、私には、どんな名画にもまさって記憶に残る生涯の映画である。

一方、文法書(当時の岩波全書の一冊)の理解は進まなかった。二回三回と通読しても、一向に要領を得なかった。質問をしようと思っても相手が居ないのだからどうにもならない。困り果てていたところに、イタリア語講習会のポスターが目に入った。仙台でイタリアに関心を持っている人たちの「東北イタリア会」が、京都大学のイタリア文学の助手を招いて一週間、毎夕、講習会を開くというのだ。これぞ天の助け。さっそく主催者たちを訪ね、感謝の意を表しながら色々の雑務への協力を申し出た。そして、夏、受講者の受付を手伝いながら、6回の講習会を受けた。人から教えてもらう外国語の勉強はこんなに楽でこんなに分かりやすいものかと、感激の連続だった。最終日の夜、講師に感謝の夕食会が開かれた。文法書を読んで混乱し困惑していたのと、講習を受けての感激と感謝の言葉を述べると、あの本は読む程に分からなくなるよと笑いながら、別の、本屋では売られていない文法書を教えてくれた。その後すぐそれを取り寄せ、繰り返し読んだ。

私が文法書を読んで少し分かってきたと感激していた時、研究室の同年代の友人たちは、もう毎日、専門書を読んでいた。日本を研究している人は日本語の本を読むのだから楽なものだ。英米を専攻している人は中学生の時からなじんでいる英語で、独、仏を専攻している人でも、教養課程の時から習い始めた独語、仏語で読んでいく。しか

も英、独、仏語については、学部時代の専門書講読やゼミ、大学院マスター時代のゼミなどで、専門書を読む訓練をまさに専門の教授たちから受けている。私も英語と独語についてはそうした訓練を受けていたし、独語については助手になってイタリア語を始めてからも、毎週、指導教授の学部と大学院のゼミで専門書をテキストとして読んでいた。しかし、イタリア語については、たった6回の基礎文法講習会を受けただけで、他に何の訓練も受けていない。立ち遅れは、まさにどうしようもないものだった。

嘆いていても仕方がない。とにかく食らいついでみる他はない。しかしやはり歯がたたない。分からないことが続出するのに、それを尋ねる人がいない。いや、分かったと思った部分でも、はたして自分のその理解が正しいのかどうか確かめようがない。困った。本当に困った。そこで、イタリア語の本で英語や独語に訳されているものを選び、両者を対照しながら読む訓練を始めた。これはかなり有効だった。しかしそれでも、なぜ当のイタリア文が当の英文ないし独文になるのか理解できない、納得がいかない場合、やはり困った。そもそも、そうした複数の外国語を介してヨチヨチと読んでいくということ自体、忍耐の要ることだった。日、英、独、仏語の書を読んでいる周囲の友人たちを見ると、自分のノロノロ、ヨチヨチの毎日が、実に歯がゆかった。何もかもすべていやになった。

そんな時、ふと、小学校(5/6年)で習った杉田玄白のことが思い出された。『ターヘル・アナトミア』のたった一行が、幾人かの人と一日かけても読み解けなかったという話だ。さっそく文庫本の『蘭学事始』を買って読んだ。玄白は、眉毛の短い説明文が一日かかっても読めなかった、わずか一〜二寸(6/7センチ)の短い文の意味が分からないうちに日が暮れた、と苦心の日々を語りながら、日本で初めて人体解剖書を理解していく感激を淡々と綴っていた。(今度、本当に久しぶりに見て確かめたら、次のような文だった。)——「たとへば、眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやう

なる一句、彷彿として、長き日の春の一日には明らかめられず。日暮るまで考へ詰め、互にらみ合て、僅か一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて有りしなり」。……「凡そ一年余も過しぬれば、訳語も漸く増し、読むに随ひ自然と彼の国の事態も了解する様にて、後々は其章句の疎き所は、一日に十行も、其餘も、格別の労苦なく解し得るようになりたり」。

ずしりと重く響くものがあった。一言も無かった。やるしかない、再び文法書に、大型のリール・テープに、イタリア語→英語・イタリア語→独語の対照に向かった。だが、いやになって放り出し、せっかく覚えかけていたものまで忘れてしまうことも再三だった。それでも、市内にかつてイタリア語を学んだことがある人が居ると聞けば、まったく未知の人でも、自分に必要な専門書をもってすぐ駆けつけ、私とこのイタリア語の本を読んで下さいと頼み、相手に有無を言わず引っぱり出して「読書会」を開いた。それぞれの専門や仕事がある人たちに、何の報酬もお礼もあげず、お願いしますの一手で無理を聞き容れてもらった。何と勝手な、何と失礼なことをし続けたものかと、今は思う。

苦心の日々を「一年余も過ごし」てようやく「一日に十行も……解し得る」ようになった杉田玄白ら先駆者たちの苦勞から見れば、自分のやっていることなど何程のものでもないという思いが、その間、折りにふれて浮かんだ。なんかプラスになることがあるかもしれないと思えば、その後も迷わず突進した。イタリアに行った方がいいかもしれないと思立ち、先の「東北イタリア会」の人たちの推薦も得て、イタリア政府給費留学生試験を受けた。イタリア人と日本人の試験官から、イタリア語の先生は誰かと、無論イタリア語で質問されて、これまでの経過をイタリア語で答えた。口で答えたとういよりは心臓で答えたといった方がよかった。おそらく、田舎都市での独学の話が試験官の共感を呼んだのだろう。初年度は腕だめしで終わるかと思っていたのに、パスした。加えて、日本の文部省からイタリア往復の旅費も得ら

れた。初めて飛行機に乗った。そして着いたローマ大学でも、今ふり返ると、突進の連続だった。

あれからもうかなりの年月が過ぎた。初めにも書いたように、今、イタリア語は一番親しむ外国語になり、同時に、一番苦勞する外国語にもなっている。外国語というものはどうにもならないものだ、今もしばしば感じる。イタリア語というジャングルに迷い込んでいるようにすら感じる。ただ、自分のやっていることなどは苦勞のうちに入らないという思いは、今も心にある。また、あの学び始めの頃の仙台の人たちの無償のご好意とご協力には、今も本当に頭が下がる。杉田玄白の『蘭学事始』にも、今度久しぶりに読み返しても、ただただ頭が下がる。外国語を学ぶことで自分の世界が広がる楽しさは学ぶ苦勞にまさるものでもあることを、これらの人々とこの書のお陰で知ることができた。(2001. 10. 21)

## 私はなぜ韓国語にとりつかれたか

経営学部

田川 光照

韓国語の勉強をはじめてまもなく2年が経つ。実力は、自己診断でハングル能力検定試験の4級程度、いばれるものではない。勉強のきっかけは、ある共同研究の調査旅行で韓国へ行く機会があったことだが、その調査旅行が終わってからも、勉強を続けている。その理由は、なんとと言っても面白いからである。

まず、第一に私にとって非常に新鮮であるということがある。中学、高校と英語を勉強し、三十数年前に大学に入ってからフランス語を専門と

した。以後、必要に応じてドイツ語やスペイン語やイタリア語をかじったが、いずれもヨーロッパの言語で、アジアの言語の勉強はこれがほぼはじめてである——「ほぼ」というのは一度中国語をかじりかけたことがあるが、発音の難しさに1ヶ月ほどでギブアップしたからである。はじめてまともに勉強したアジアの言語である韓国語は、文法が日本語とそっくりである。語彙の面でも両言語とも漢語が多く入っており、共通する単語が多い。このために、発音面では日本語に比べて複雑で難しいとはいえ、韓国語は日本人にとって非常に勉強しやすい言語である。

ヨーロッパ言語を勉強する際には日本語の発想から離れる必要があるが、韓国語の勉強の場合はその必要がない。とはいえ、異なる言語であるから、日本語の発想から微妙にずれなければならない場合もしばしばある。たとえば、敬語は、韓国語の場合絶対敬語（身内の者についても敬語を用いる）であり、日本語の相対敬語の発想とは異なっている。こういったことは、日本語の成り立ちについてあらためて反省させてくれることになり、いわば、日本語のもっている普遍性と特殊性といったものをきめ細かく照らし出してくれることになるのである。

個々の表現においても、いろいろ考えさせられることがある。一例を挙げると、極度の事柄を表現するのに「死ぬ」という言葉が日本語でも韓国語でも同じように用いられる。たとえば、「寒くて死にそうだ」は韓国語でもまったく同じで

、「(「チュウォ・チュッケツソヨ」と言う。ところが、大変おいしいということを表す韓国語の比喩表現

、「(「トゥーリ・モッタガ・ハナガ・チュゴド・モルゲツソヨ」)に出会ったとき、私は腰が抜けるくらいびっくりしてしまった。直訳すると「二人で食べていて、一人が死んでも分からないだろう」となるが、どうみても、このような表現は日本語の発想からは出てこない。「これを食べることができたら死んでもよい」とか、「死ぬほどおいしい」とか言うことはできるが、日本語話者として

は上の韓国語の表現にはどうしても違和感を覚える。それは、主観的な判断にかかわることが、対人関係の中で写實的に表現され、「死ぬ」という言葉とあいまって極めて生々しい表現になっているからであろう。常石希望先生の話しによると、さすがに韓国の人たちもこの表現を用いるときには冗談めかして言うとのことである。それはともかく、上のような表現にかりにフランス語の中で出会ったとしても、別にびっくりすることもなく、単に言語の違いというひと言で通り過ぎてしまうかもしれない。衝撃的であるのは、互いに似た言語、基本的には日本語の発想から離れる必要のない言語の中での発想の違いだからである。

私が韓国語の勉強を面白いと思った第二の点は、韓国語での音の変化である。上で少し触れたように韓国語の発音は日本語よりもはるかに複雑であるが、その一方で、系統のまったく異なるフランス語の音声面と相通じるものがある。子音については相異なる点が多いが、口腔母音をみれば、韓国語の8個の母音のうちフランス語にない母音は平唇の「ウ」（唇を横に引いて「ウ」）一つであり、半母音をみれば、韓国語の2個の半母音はフランス語の3個の半母音に含まれる。ただし、これだけのことであれば、イタリア語やスペイン語の母音は「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の5個であるから、これらの言語と日本語の類似のほうが韓国語とフランス語の類似よりも大きいことになる。韓国語とフランス語に相通じるものがあるというのは、単に個々の母音に類似点があるということだけではなく、音と音との間に起こる現象にも相通じる面があるからである。

フランス語には、アンシェヌマンやリエゾンという現象がある。アンシェヌマンというのは、発音される最後の子音が次の単語の冒頭の母音に連続して発音される（音節が移動する）現象であり、たとえば、「彼は」を意味する主語代名詞il（「イール」）のあとに「～である」を意味する動詞est（「エ」）を置いてil estとすると、発音は「イール・エ」ではなく「イレ」となる。これに対してリエゾンというのは、語末の本来発音されない子音字が、

次にくる単語の冒頭の母音にひっかけられて発音される現象であり、たとえばil estのあとに「名古屋に」を意味するà Nagoyaを置き、「彼は名古屋にいる」という文を完成させてIl est à Nagoya.とすると、発音は「イレ・ア・ナゴヤ」ではなく「イレ・タ・ナゴヤ」となる。

これらによく似た現象が韓国語にもみられる。たとえば、「時間」を意味する（「シガン」）に「～が」を意味する助詞（「イ」）をつけてとすると、発音は「シガン・イ」ではなく「シガニ」となる。これは、フランス語文法で言うアンシェヌマンと同じ現象である。そして、「ない」を意味する（「オプタ」）の語幹（「オプ」）に「～なので」を意味する語尾（「ソソ」）をつけてとすると、の人が発音されて「オプソソ」となるが、これはフランス語文法で言うリエゾンに相当するとみることができる。また単語と単語の間での音の変化も面白い。たとえば、「食べた」を意味する（「モゴッタ」）の前に「～できない」を意味する（「モツ」）を置いてとすると、発音は「モツ・モゴッタ」ではなく「モン・モゴッタ」となる（鼻音化現象で、これはフランス語にはない）。結局「時間がなくて食べることができなかった」という文を完成させてとすると、全体の発音は「シガニ・オプソソ・モン・モゴッタ」となる。

上に述べたのはごく簡単な例にすぎず、このほかにも、韓国語を勉強していてフランス語での綴り字と発音の関係を連想させられるようなことがよくある。ただし、韓国語にみられる音の現象はフランス語におけるよりもはるかに複雑で多様であり、フランス語よりも難しいと私は思っている。しかし、それは本来発音しやすいがゆえにそうになっているはずなのである。実際、韓国語を勉強していると、この音の変化が快感となり、やみつきになる。

最後にひと言。経済のグローバル化に伴い、英語（米語）学習の必要性は今後もますます大きくなるであろうが、それは他の言語の価値を低めるものではない。言語は文化と一心同体であり、人

間の基本的な営為である言語活動は文化的営為である。互いの言語の尊重は、互いの文化の尊重でもある。韓国で、つたない韓国語を少しでも話すと、韓国の人々はすぐ  
 (「ウリ・マルル・チャーラシネヨ」=「私たちの言葉がお上手ですね」)とってくれる。異なる文化間での人と人との交流そして相互理解は、このようなところからはじまるのではないだろうか。ちなみに、21世紀は多言語・多文化の時代と言われている。



成せば成る！数学の河田賢二先生と市場のおばさん：河田先生は、訪韓前の1ヶ月間に韓国語入門書付属のCDを100回以上聞いて勉強し、現地では韓国語でコミュニケーション。

## 私の外国語学習について

現代中国学部  
服部 健治

私は一応中国語と英語がしゃべれる。“一応”といったのは、何とか相手と意思が通じ合え、こちらの意図すること、つまり仕事や研究事業の目的を、これまた何とか達成できるということであ

り、人に披露できるほどの実力はない。もっと恥ずかしいことは、大学時代に中国語、英語以外にドイツ語1年、フランス語と朝鮮語は2年、ロシア語はプーシキンの詩を聞くまで3年もやったが元の木阿弥である。どれも何一つ実を結んでいない。

ただ、英語学習でプラスであったのは、米国の大学院留学のとき、毎週英語でペーパーを書かされたこと、2年間アメリカの白人家庭にホームステイしたことである。ラリー、ドニー、シェリーの兄、弟、妹は今どうしているのだろうか。中国語のマスターでは、大学で中国語を専攻したが、やはり前職の財団法人日中経済協会の仕事で通算10年間、北京に駐在したことが幸運であった。

とはいっても、私の中国語は英語と同じで実践の中で覚えたので中途半端、本来ならここで紹介するのもおこがましいと思っている。多くの中国の友人は私の中国語を聞いて、おせじと気を悪くしてはいけないと思い、「講得好(上手ですね)」とってくれる。私の本心は上手とはいっこうに思っていないので、いつも聞き流している。それとは別に、きまってこのように答えている。「我的中文、基本上没有问题、但是实际上有问题」(私の中国語は基本的に問題ないが、実際上は問題あり)と。要するに、外国語はできるか、できないかしかないのであり、ちょっとできるなどはできない部類に入る。そう考えると、私の中国語も「できない」部類に入るのである。外国語マスターは趣味やアクセサリーでないので甘く見てはいけない。畢竟到達点はない。

その実、私の女房に「私の外国語マスターについて書いて欲しいと頼まれている」といったら、あなたの外国語マスターはいいかげんだから読んだ人が誤った考えをもつので、絶対書かないほうがいいと嘲笑し、苦言を呈する。

ちなみに私の妻は華僑である。今は日本国籍を取り、2児の母であるが、生まれはシンガポール、育ちはジャカルタ、北京で高校時代を過ごし、中国全土に極左路線が吹きまわった文化大革命の終わりごろに広東省の農村に下放した。その後、香

港で事業をしていた彼女のお父さんの尽力で中国大陸を脱出し、香港で1年間英語を勉強した後、アメリカの大学に留学した。米国留学中に私と知り合い、大学卒業のあと結婚のため日本に来た。波乱万丈、有為転変の人生といえる。

その結果、北京語はもとより両親のふるさとの言葉である閩南語（福建省南部の方言、台湾語と同じ）、下放の成果として広東語、半分母国語であるインドネシア語、その兄弟語であるマレーシア語、そして英語、日本語と7つの言葉を操る。そんな言葉上のタレントである愚妻が私の外国語をバカにするのだから、私の実力もたかが知れている。多くの華僑が多種の言葉をしゃべれるのは彼らの人生そのものだから仕方ない。私と比較されたら困るが、それでもあえて書くのは、私は私なりのやり方で勉強したからである。

外国語のマスターの第一はまず日本語をよくしゃべることである。日本語で話す内容を持たないのに、どうして外国語までうまくなれるだろうか。語学学校にいくら行っても、何かしゃべろうとする話題や自分なりの見識、判断、知識を持っていないと、上達することはない。はっきりいって無口な人はまず外国語はうまくならない。日本語でもしゃべらない人が、いきなり外国語でむちゃくちゃしゃべれるなんてありえない。ジキル博士とハイド氏なら別であるが。

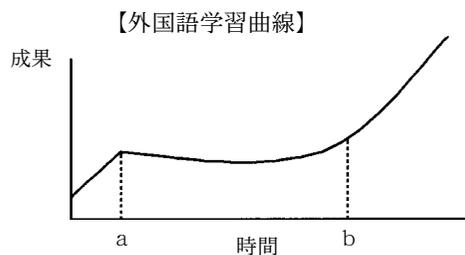
第二にアウトプットからインプットを考えること。具体的にいうと、自分がある場所である問題についてスピーチすると想定して、それを外国語でどのように言うのか考えて練習することである。圧力、強制をかけるのである。外国人が聞いていると想像して、こういった言い方、表現は外国語でどのようにいうのかをまず考えること。いきなりがむしゃらに単語を覚えても意味がない。自分の仕事や勉強に関係する、興味のある事象からまず単語をマスターしていく。身に付くきっかけは興味である。

第3は聞く力 (hearing) をつけること。聞く力を100とすると、しゃべる力は半分である。聴いて分からないのに、どうしてしゃべれるのか。勉強

の方法はまず毎日テープを聞いて書き取る、dictation (中国語では听写という) の練習が肝要である。目で見て分かってもしゃべれない。赤ちゃんの学習過程と同じである。一種の単純肉体労働である。

第4は口慣らしの読む練習である。朗読ともお経を唱えるとも言える。同じ教科書を3回読むまで使うことが大切である。文章を暗記しようなどと欲を出さず、ひたすら毎日10分ぐらいずつ読み進むこと。教材は今の自分のレベルより一つ下のレベルの本を使うと良い。高校の教科書を音読するためにもう3度使用してみたらどうか。注意すべきことは、ぶ厚い教材を使用しないこと。薄いのだと早く終りマスターした気分ひたれる。偉そうに言っている私も大学の教授になって以来、忙しさにかまけてやっていないのが実情であるが。

第5は、「継続は力なり」。外国語のマスターのプロセスは図のような右上がりの放物線を描く。aからbまでの時間帯はいくら勉強しても成果が見えず、いらいらしていやになる。この期間にギブアップする人が多い。その苦しい時期が過ぎると、急に成果が見えてくる。そこまで辛抱できるかどうか、外国語マスターの分岐点である。これをもって柔道、剣道、茶道、華道等に倣い「外国語道」と言う。



私の人生を振り返って、やはり英語と中国語をやっていて良かったと感じる。特に中国語を勉強したおかげで、中国関係に接し就職においても、思索においても、研究においても私の人生を豊かにしてくれた。若い諸君が中国語を勉強して決して悔いはないであろう。ましてや21世紀は中国が

台頭し、注目されるからである。

最後に外国語ができることは、頭の良し悪しに関係ないと肝に命じるべきで、できなくても悲観する必要はない。ただ、外国語をマスターすると世界が広がり、知識が深まる。そして、マスターした人は、そうでない人と比べて、新しいモノへの好奇心が強く活動的、未知への興味が強く理知的、我慢強さの「3強」を兼ね備えていると見られるだろう。

## 外国語の勉強は「話すこと」から

現代中国学部  
劉 柏林

言語には口語と書面語という二つの形がある。口語は書面語の基礎でもあり、人類のコミュニケーションの重要な手段でもある。日常生活では口語が書面語よりよく使われ、人間社会に欠かせないものである。しかし、外国語を勉強する人は口語より書面語に力を入れる人が多い。なぜかというとなら書面語は口語より発音の正確さが要求されないし、作文を書く時にゆっくり考えながら書けばよいからである。それに、教育機関では外国語の実力評価は筆記試験で評価することが多い。それで書面語を重視し、口語を軽視するという現象が表れたのである。これはもちろん外国語教育の基本方針と教育者の教え方にも関わっていることである。

私はよく学生に「どの国の言葉がやさしいですか」、「中国語は本当にむずかしいね」と言われるたびに「母国語の以外の言葉はみな難しいですよ、みなさんにとっての中国語ももちろんのこと

です。難しくなければ、大学に入って勉強する必要はないのではないですか」と答えている。確かに外国語は容易に身につくものではなく、時間をかけて勉強しなければ、上達するものではない。中国では外国語教育の基本は「聞く、話す、読む、書く、訳す」ことである。外国語をマスターするには良い環境(客観的要素)と自分自身の努力(主観的要素)が必要である。むしろ、後者のほうが重要であると言えよう。中国語には「有志者事竟成」(志さえあれば必ず成功する)という諺があるが、私は外国語を勉強する過程において、これを痛感している。志と自信がなければ、語学に限らず、他の事もマスターできない。「習っている外国語を必ず身に付ける」という意志を持つことが大事だと思う。

私は外国語を勉強する以上、発音は勿論のこと、会話をきちんとやらなければならないと思う。外国語を習得する際、聞くことと話すことは最も基本である。一般的に自分の勉強している外国語が正しく聞き取れるなら、その言葉の発音を真似することができ、文章も一応読めるのである。これらは相互補完の関係にある。中国語を母国語とする人が日本語を習う場合として、日本語を母国語とする人が中国語を習う場合も、最初に正しく練習することが大変大事である。最初の発音をしっかりマスターしておかないと、後々勉強に支障が出てくる。始めに覚えた変な発音はあとから直そうとしても、一度ついてしまった癖はなかなか直らない。だから、発音の基礎を固めることは外国語学習の第一歩である。初心者にとって、日本語の「長音」「濁音」「促音」「拗長音」はわりあい難しいと思う。中国語の標準語にはそういう音素がないからである。中国の四川、湖南、陝西、福建省など長江沿岸地域出身の人は始めのうち、日本語の「な」と「ら」がうまく区別できない人が多く、ずいぶん苦労する。これはその地域の発音の特徴が影響しているようだ。私の体験からいうと日本語を習いだして最初の一ヶ月間は、先生やネイティブスピーカーの模範的な発音テープを繰り返し聞きながら、その発音を何回も

真似し、発音の要領が少し分かったら、恥ずかしがらずに自分で発音をして先生や先輩に聞いてもらい、直してもらうことが外国語を勉強する近道である。(私の学生時代、テープレコーターは、高嶺の花であった。外国語大学は恵まれたほうで、各クラスに音質のあまり良くないテープレコーターが一台置かれ、学生たちは毎日それを囲んで授業用のテープを聞いていた。今は中国の学生にしても、日本の学生にしても、テープレコーターはもちろんのこと、いろいろな録音教材がたくさんあり、本当に幸せである。)

「聞く」と「話す」練習をすることは学生の語学センスをみがくの一番重要である。聞くことは話すことの基礎であり、よく聞いてこそ、初めてよく話せる。聞くことはただ大脳の聴覚を機械的に刺激するだけではなく、耳で音を聞くことを通して、話された内容に対する理解、記憶、分析、判断など脳を働かせることが含まれている。聞き取る速度および正確さには人の理解力と知識の広さが反映される。だから、私は外国語を教育するにしろ、勉強するにしろ、「聞くこと」と「話すこと」から、着手すべきであると思う。

私は大学時代に毎朝録音テープを2回ほど聞きながら、大きな声でその発音の真似をし、新しい単語と本文を覚え、それから通常の講義に出て、夕食後、授業の内容を復習してから、クラスメートと日本語で会話の練習をした。相手のミスに気が付いたら、お互いに直しあう。このようにして会話を進めていく。塵も積もれば山となる。こうしたことが私の外国語の学習法であり、みなさんのご参考になれば幸いである。



## より良い外国語の授業をめざして

経営学部

島田 了

学生の皆さんはもうご存知でしょうか、愛知大学は2001年度から「FD活動」を全学で始めています。「FD活動」とは、「大学の学部教員の教育および研究を開発・発展させるための活動」ですが、なかでももっとも重要と思われるものが、学生にとっていかに魅力的なそして役に立つ講義をするかということです。

それと平行して名古屋語学教育研究室でも、外国語を担当する教員の間で情報の交換をおこない、よりよい語学の授業を目指していくことになりました。その第1回目の集まりが6月22日にあり、そこで活発な意見の交換がおこなわれましたので、その結果を簡単に報告したいと思います。

やはりほとんどの教員が指摘したのは1クラスの人数の問題でした。法学部・経営学部対象の大人数の授業では個人個人の指導がなかなか出来ない、学生との距離が縮まらないといった声が圧倒的でした。クラスの人数は、現在準備中の新しいカリキュラムの導入などにより改善を図るよう努力していますが、現在の条件のもとですぐにできる有効な方法として、座席を指定することによって学生一人一人の名前を把握するようにする、また必ず一人一回はあてるなど、授業に参加しているという自覚が持てるように指名の方法を工夫している等の報告がありました。

学生の声小さいので発音の指導が難しいという悩みに対して、グループ学習をさせて、クラスの他の学生との人間関係を作らせることによって対応しているという報告もありました。その他各

人さまざまな工夫をされている様子がうかがうことができました。せっかくのこうした工夫が一人のものに終わらないように、互いに成果を利用しあえるように、情報の交換の大切さを確認して、今後もこのような研究会を継続していくことになっています。

またすでに学部性格上小人数クラスでの授業を実現している現代中国学部の教員から、環境が整備されていても、学生の自発的な勉強意欲に直接結びつくものではない、内容に関する工夫がより問題なのだという指摘がありました。

その他留学生向けの日本語を担当する先生からは、留学生と日本人学生との交流の機会が少ないのはとても残念だという指摘もありました。

外国語担当教員は、少しでもよい授業が出来ればと努力しています。そのためには教員の努力はもちろんのこと、学生の皆さんの意見を少しでも多く聞かせてほしいと思っています。意見や要望のある学生は、中央教室棟3階の語学教育研究室を訪ねてくださるか、あるいは授業の終わったときなど担当の先生に気軽に声をかけて、授業に関して何でも気の付いた事を話してください。今後の授業に役立てたいと思います。

## Town と City

経営学部  
安藤 聡

英語の 'town' と 'city' の違いは何か。多くの人は 'town' が「普通の町」で 'city' が「大都市」と考えるであろう。結果的にこれではほぼ正解である。前者に「町」、後者に「街」という漢字を当て

はめて考える人も多い。「町」の原義は「田圃の中の畦道」だからこの字は何となく牧歌的な地方都市の風景を連想させるし、「街」は元来「道が交わる場所」すなわち「十字路」を意味していて、そうすると主要道路が交わるには必ず主要都市があることからわかるように、「街」が意味するのはそれなりに大きな都市なのである。

しかしながら「犬」と 'dog' が必ずしも等号で結ばれるとは限らないように、'town' と「町」、'city' と「街」が完全に対応するというわけでもない。話は逸れるがなぜ「犬」と 'dog' が同じでないのかと言えば、「犬」という漢字から普通の日本人は、あるいは少なくとも私は、柴犬、秋田犬、もしくは雑種の和犬を思い浮かべる。一方で 'dog' という英語が通常英語圏の人の心に喚起するものはまずこれらの種類の「犬」ではない。因みに私は 'dog' というとまずボーダーコリーをイメージする。

そのようなわけで、'town' と「町」、'city' と「街」もまたそれくらい異なる場合があるのだ。詳しく知りたければ辞書を「読む」のがよい。『ジーニアス英和辞典（第二版）』（大修館）によれば 'town' は「1. 町 (villageより大きくcityより小さい)。2. [通例the~] (田舎に対して) 都会、町なか。3. [通例無冠詞で] (地域の中心となっている) 都市。4. [the~; 集合的に; 単数・複数扱い] 町民、市民; 大学町の住民。5. ((米)) 群区。6. ((英)) 定期的に市 (いち) が開かれる所。7. ペンギン [プレーリードッグ] の巣が多い所。」である (例文、補足説明は省略したが、本当はこういうところも読むとよい)。なぜペンギンとプレーリードッグなのかは大いに気になるところだが、それはともかく1.の定義にも関わらず 'town' が意外にも「街」のニュアンスを含んでいることがわかった。そういえばポール・マッカートニーの曲に「ロンドン・タウン」というのがある。

一方 'city' はといえば、同じく『ジーニアス』によれば「1. (田舎に対して) 都市、都会。2. (行政上の正式の) 市 ((米国では州の認可を受けた自治体で county の中の一単位。通例 town より大き

い。英国では国王の勅許を得た town で、cathedral を有し bishop がいる))。3. [the~; 集合的に; 単数・複数扱い] その市の (全) 市民、住民。4. [the C ~] シティ (London 旧市内の中心部約1マイル四方の地域。英国の金融・商業の中心地; 米国の Wall Street に相当)。(英国の) 財界、金融界。」ということである (5. と 6. は形容詞の用法なので省略)。ここで 'town' との違いを考える上では 2. が重要であることがわかるだろう。要するにアメリカ合衆国では 'city' は「政令指定都市 (のようなもの)」、連合王国では「大聖堂がある都市」を意味するのだ。従って 'city' は結果的に「大都市」ということになるのである。

ところが話はそれほど単純ではない。この定義からすると英国ではどんなに大都会であっても大聖堂 (cathedral) がなければ 'city' と呼ぶことは出来ず、またいかに小さな町であっても大聖堂さえあればそれは 'city' なのである。ここで言う「大聖堂」とはアングリカン・チャーチ、別名チャーチ・オブ・イングランド (日本語でよく「英国国教会」とか「イギリス国教会」などと言っているがいずれも不正確で、正しくは「イングランド国教会」) の大聖堂である。これはイングランドとウェイルズに約 50 あり、それぞれに主教 (bishop) がいて周辺の市町村を「教区」(diocese) として管轄する。この教区は市町村ごとに「小教区」(parish) に分けられ、ひとつの小教区にひとつずつ「教会」(church) がある。スコットランドの 'city' には長老派プロテスタントの「スコットランド国教会」の大聖堂がある。大聖堂を持たない大都会はミッドランズ (イングランド中部) の工業地帯に多く、たとえばリーズ、ノッティンガム、ストウク-オン-トレントなどである。リーズは交通の要所でもありヨークシャー北部の羊毛、織物、機械工業の中心地で、ノッティンガムはロビン・フッドとレース織りとアラン・シリトウの小説で有名。ストウク-オン-トレントといえばウェッジウッド、エインズリー、ロイヤル・ドウルトンなどの陶器である。いずれも世界的に有名な大都市ではあるが、シティとは呼ばれない。大

聖堂があって主教がいる街はたいてい古くから栄えていた街であるが、大聖堂のない大都会はその多くが産業革命以降に発展した工業都市である。

大聖堂を持つ小さな町ということになると、すぐに思い浮かぶのはウェルズとイーリーである。ウェルズ大聖堂は小さなウェルズの町に比例するかの如く英国で最も小さい。この町はむしろこの「英国最小の大聖堂」を観光の呼び物にしている。ここは中世の巡礼地グラストンベリーにも近く、またこの大聖堂の教区には有名な観光都市バースがある。むしろバースの街の中心にある修道院の方が大きくて風格があるので、こっちの方が「大聖堂」に見えるくらいである。一方のイーリーはフェンランズという平坦な沼沢地帯の、僅かに高くなった「丘」の上にある小さな町である。町の名前は近くを流れるグレイト・ウーズ川に鰻 (eel) が多く生息していたことに由来する。町は小さいがイーリーの大聖堂は荘厳なものであり、周囲を平地に囲まれているためかなり遠くからでもその姿を眺めることが出来る。この大聖堂はフィリップ・ピアスの童話『トムは真夜中の庭で』の中で、物語の背景として重要な役割を演じている。寒波で凍結したウーズ川をイーリーに向かってトムとハティがスケートで滑る場面ではこの大聖堂が彼らの憧れの象徴であり、また二人が大聖堂の塔に登る場面では塔の階段が彼らの成長を暗示している。この小さな町の大きな大聖堂は「イングランドで最も美しい大聖堂」と言われている。

ところで、英国は「例外」「不規則性」の国である。英文法は例外ばかりであり (非英語圏の英語学習者は皆このために苦勞する)、あの国では都市計画から庭園様式に至るまであらゆるものが不規則である。そして英語の有名な諺に「例外なき法則なし」(There is no rule without exception.) というのがあるほどで、つまり何が言いたいかと言えば大聖堂を持たない 'city' も英国には確かにあるということである。主教がいなくとも特別に「シティ」のタイトルを与えられた街があり、先に言及したバースがそれである。私はこのことを最近まで知らなかったの、バースの交差点で「City

Centre」の道路標識を見るたびにこの街には主教がいるものとばかり思いこみ、例の修道院を大聖堂だと信じて疑わなかったのだ。あの小さなウェルズ大聖堂がこの世界遺産にもなっている立派な街を管轄しているという事実を知ったのは実はごく最近のことなのである。

## 2001年度 夏期アメリカ・ セミナー雑感

法学部

片岡 邦好

この4月よりアメリカ交流委員に就任し（と申したらもうこの委員会は改組されましたが）、夏期海外研修の引率で、初めてこのサウスイースト・ミズーリ州立大学（Southeast Missouri State University）のあるアメリカ、ミズーリ州、ケーブジラードー（Cape Girardeau）を訪れました。ミシシッピ川沿いのこの町の由来は、まだアメリカ南部がフランス領だった18世紀、この地の監督官（？）だったフランス人Girardotにちなんで名づけられました。ミズーリという何やら南部の香り漂う地域性と（実際は南部と中西部の境界線辺りだそうです）、サウス・イーストという地方的な響きのためか、田舎の小さな大学を想像していましたが、これがなかなか立派で美しいキャンパスに少なからず驚きました。数あるアメリカの大学の中でも間違いなく平均以上に位置すると思います。日本で一番美しい大学がどこか、といった調査結果があるかどうか知りませんが、もし日本にあれば一・二を争うことでしょう。学生数8000人強の割には広いキャンパスと、緑に囲まれ起伏に富んだ丘陵に立つ、石造りの瀟洒な建物は歴史を感じ

させます（1873年設立）。また、アメリカの大学では良く見かける光景ですが、木々にはリスが走り、あたりを鳥が（そして夕方には蛍も）飛び交う様子は心休まります。そして町外れを流れるのは、トム・ソーヤーで有名なミシシッピ川です。日本の大学は、ハード面では土地が限られているだけでなく、「ぼろは着てても心は錦」的精神論で建物に金をかけず（逆に、建物ばかりに金をかける「ハコもの大学」への批判もあります）、学生の入学時の偏差値ばかりが強調されて、入学してからの環境とサポートへの配慮が少ない気がします。（ソフト面としての教授陣・大学運営があまり問題にされないことにも問題があります。）ハード面ばかりをいじるのは姑息だといった通念があるのかもしれませんが、「衣食足りて礼節を知る」とまではいかななくても、物心両面で「ぜひここで勉強したい」と思わせる環境作りは、その後の学生の成長にとって大きな要因だと感じました。（とはいえ、学校間の学籍異動が容易にならなければこれによるメリットは十分生かされないかもしれませんね。）

また何といても、生活面で気になるのは食事の質です。この大学のカフェテリアは、これまで訪問したアメリカの大学の内でも（5—6校しか比較できませんが）上位に位置します。これと違ってずば抜けたものはありませんが、一般的に「食べられます」。町には数軒の中国料理店とかなりいけるタイ料理と中近東料理の店がありますが、日本食レストランはありません。留学生の最大派閥である日本人（多いときは100人以上いるらしい）がこれだけいて、一軒もないのは不思議です。腕に覚えがあつて一旗挙げたい向きにはお勧めの地です。しかし娯楽施設はほとんどないので、家族持ちには落ち着いた町でも、若者には退屈な町かもしれません。そのせいで、平日は学校にいて週末はセントルイス（車で2時間くらい）などに遊びに出かけるようです。今回英語担当のDr. McCannはこの状況をして、“suitcase university”だなどと皮肉っていましたが、街に住みたがる昨今の若者の気質を反映した表現です。

滞在中はおおむね天候に恵まれました。しかしこれも運が良かったからのようで、例年のケープは日本同様蒸し暑く、もう夏はうんざりというのが本音のようです。今年はというと、雨も少なく気温もそれほど上がらず、地元の人によれば8月上旬までは9月のような過ごしやすい夏だったようです。しかし8月20日を過ぎて本格的に蒸し暑くなり、日中はちょっと外に出るのもおっくうなくらいでした。ひとたび屋内に入れば全館冷房でガンガン冷えてますから（彼らには節電という発想はないらしい）、居場所に困ってしまいます。私は来客用の宿泊施設にいましたが、空調が良すぎて毎晩震えていました。



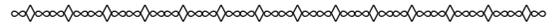
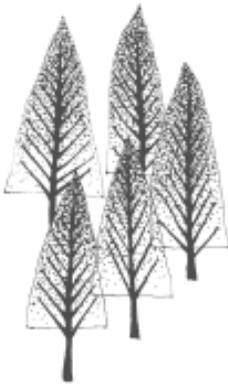
ミネソタ州ミネアポリスにある  
アメリカ最大のモール、Mall of America.  
屋内遊園地もある

町には小さなモールがひとつあり、少ないながらもおしゃれな店も入っています。しかし三好のジャスコ、豊川のSATYには遠く及ばず、侘しささえ感じさせますが、小さい分気軽に、お手軽に買い物が出来ます。（いわゆる大型量販店は、他にも

幾つかあります。）しかし、そこはアメリカ、モールまでのバス路線がないので車がなければどうにもなりません。結局自分で行ったのは、同行の引率者の方と一緒に買い物に出かけたとき限りでした。（大学からそのモールまでタクシーで7ドルくらい。）実はミズーリに行く前に、ミネソタにいる友人宅を訪問したのですが、そのついでにミネソタ州、ミネアポリスにあるあの有名な「モール・オブ・アメリカ」（アメリカ最大のモールで屋内遊園地などもある）に行ったので、そのギャップに…別に驚きませんでした。広すぎてかえって疲れるので、小さいのもそれなりのメリットかな、という気もしました。

町自体は落ち着いていて、治安面でも非常に安心できます。土地家屋の値段も安く、こっそり聞いたところでは、大学に隣接した環境の良いところで、地下を含めて3階建ての10部屋以上ある家屋と、さらにその倍はある巨木の立つ庭を含めて20万ドル（約2500万円）くらいではないかとの答えでした。（なんか書いて損した気分になってきた…）そして、遠く大学の北の丘陵地には、まさに大邸宅がニョキニョキと聳えています。面白いことに、アメリカのほとんどの町は大体北部が高級住宅街で、南に低所得者層の地域があり、治安もあまりよくないことが多いのですが、このケープも例に漏れず、まさにその系統を反映しています。ある人は南北半球の経済格差の反映だなどと揶揄しますが、そういった暗黙の認知地図が、アメリカ人の頭の中に出来上がっているのかもしれない。もうひとつの傾向は、高いところとビーチが好きなこと。お金持ちは山の中腹とか丘の上、またはビーチに好んで住みます。平民は平地なんです。まあ、わからないではありませんが。

幸いセミナーも無事終わり、今年は例年より一週間早く、9月上旬に帰国しました。そして一週間後にあの同時多発テロが発生しました。これが今後海外セミナーにどのような影を落とすかわかりませんが、これからも安全なセミナーが行われ、ますます多くの学生諸君が海外生活と文化に親しめることを心から祈ります。



名古屋語学教育研究室のホームページを開設しました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/goken/>

— '01 公開講座「言語」のご案内 —

愛知大学言語学談話会

2002年  
1月12日 「日本語話者がフランス語を通して見た韓国語」  
田川光照(愛知大学経営学部教授)  
「漢字文化圏における表音文字の背景」  
陶山信男(愛知大学名誉教授)

#### 編集後記

移動がたやすくなった時代、外国語一つ覚えておけば、世界が広がることは確かである。

それにしても新しい言葉の修得は、難しいものだ。今回寄稿いただいた先生たちは、困難を乗り越えようと様々な苦勞をされている。教材も機器も機会もふんだんにある現在とは違って、なにもかも乏しく、外人教師に学ぶ機会はごく限られていた時代だった。朔太郎ではないが、25万もすれば、アルバイトが一日500円の時フランスへ行くことなど学生の身分では途方もないことだった。このようなとき重要なのはただ意志の強さ、絶対に物にしてやるとの固い決意である。須藤先生のもがくようなご努力、大島先生の今なお突き進もうとされているお姿には敬服する。

ついだから、編者の学び方も紹介しよう。先生たちと同じ世代だから、もちろん劉先生の言われる書面語の修得中心の方法である。学校の授業はまことに歯がゆいほどゆっくりだった。読本の範囲も狭いのが普通だ。このままではいけないと思い、文法を終わって最初に取りかかった原書はジッドの『狭き門』だった。独習テキストが決まった。訳本を買ってくる。テキストの訳を書き記す。一日の終わりにその訳を訳書と照らし合わせて、間違いを訂正する。思えば無謀なことをしたものである。恐ろしく難しかった。しかしこれを終わったときの喜びは大きかった。祝杯をあげた。恋愛小説の名作を読んでしまえ、と我が身に言い聞かせて、あとはモッパッサンの短編、『クレージュの奥方』、『アドルフ』、『マノン・レスコー』は電車の中で読んだ。夏休みにはスタンダールの短編、『赤と黒』、『パルムの僧院』と続いた。恋愛小説ではないが、ネルヴァルの『オリент紀行』はおもしろかった。以上が4年生の夏までに読んだ編者のフランス書である。恋愛小説の傑作、バルザックの『谷間の百合』は、草木の名前に閉口し三分の一までで投げ出したまま現在に至っている。

力が付いていくのを実感できることほどうれしいものはない。インテンシブに若いときのやってこそ上達するものだ。卒業すれば、時間がないことははっきりしている。今が実力を蓄えるときだということを忘れないでいてほしい。

(S・K)